



統一



第一百九十號

明治三十年二月廿四日第三種郵便物認可
明治四十二年十一月十五日發行第一號百九十九號
明治四十三年十二月十五日(每月一回十五日)發行

(每月一回十五日)

(東京 三島印刷株式會社 刷)

目次

佛教の女性観	大 僧 正 本 多 日 生
會式に對する所感	村雲婦人會委員長 松 森 靈 雲
會式に對する所感	子 爵 小 笠 原 長 生

報 道

法華經講演集 (自一〇七頁至一八七頁) 大 僧 正 本 多 日 生

佛教の女性観 (其三)

(妙教婦人會講演) (熊井本光筆記)

本 多 日 生

本日は佛教の女性観に就て御話する都合であります、前會にも二回に亘つてこの講題の下にお話し致しましたたが、其の要領は佛教は如何に女性を觀て居るかと思ふに、從來は女性に特種の惡徳なりとして、男子よりも罪の深きものと觀られ、婦女子自らも悲觀して居たが、これは非常なる誤解であつて、決して女子が男子よりも罪惡の多きものではない、信仰の點から言へば女子は極めて優し性質と極めて熱烈なる情緒を有する故に、佛陀の大慈大悲に接する點に於て、男子よりも切實である、而して信仰は宗教の生命であるから、この靈性を先天的に具へて居る女性には、佛教中に於て光輝を放つて居る、智力を以て眞如實相を覺らんとするは一應高尚なやうではあるが、宗教の神髓は信仰に存する故に、熱烈なる信仰性を有して居る女性の方が

確かに幸福である、阿術達が舍利弗と問答して、卿等は大小乗の理論に屈托するも、妾はたい佛陀の大慈大悲に乗すと答へしは、眞に快心の至りである、又勇氣ある例としては、須摩提と三摩羯との説話を引いて、現代の女性に欠乏せる勇氣の復活を勧めたのである、女性にして信仰に生きた場合には男子よりも勝れた力を顯はすものである、更に智力の賢愚に就ても、今日尙は高等教育を施す事の女性には不適當ならずやと疑ふものもある、女子が諸種の壓迫を受けた爲め、本性を發揮する時機がなかつたのである、佛陀の女性観は斷じて男子に劣るものにあらずと説かれて居る、これは月上姫の實例と離垢施女經の説話に由つて智惠の文殊と智惠の舍利弗が見事と論詰せられた實例を擧げたのである。

元來大乘教には、無男無女と説て根底より男女の差別を見て居らぬ、彼の男子は外に働き女子は内を治めると云ふ分擔は、土地の風俗習慣に依つて異なるので、日本に於ても八丈島の如きは内地と全く反對である、

依つて男女は根本から相違のあるものではない、習慣や事情によりて男女の職業を別にするのである、多くの人は内を治める女子の役よりも外に働く男の方が困難だと思つて居るが、併し夫をして後顧の憂なからしめ一家を圓滿に治むるは随分面倒な事である、その困難は決して男子に劣るものではない、されば大乘には男女を平等に觀られたのである、宗祖上人は男女を日月雨風の如しと喩へられたが、この意は男子を日の光りと見、女性を月の光に喩へたので、各々特殊の光があるのである、太陽を眺めても決して中秋觀月の興趣は浮ばない、又雨眼にしても捕はねばならぬ、雨眼に大小が有らふものなら、哀れなる不具者である、もし片方が潰れた日には随分不自由でもあり、又醜いものである、されば女子が甚だしく見劣りする様では男子も多大なる不幸だと感ぜざるを得ない、然るを幸にも女子が相當なる修養を積んで居つたならば、こゝに完全な家庭が成立ち随つて世の文化も健全に發達するのである。

今日は佛陀が女子に對して如何に同情を垂れ玉ふたかその同情は如何なる點にありやを述るのである、恐れ多いことであるが、佛陀と女子の本性とは洵によく似て居るかと思ふ、法華經の述門までは理智の佛陀を勝れたものと思つて居たが、本門壽量品に至つては、慈悲の佛陀を正意として説かれてある、智の佛とは即ち大日如來の如く、理智の光赫々として、仰ぐだに眩しむ佛であるが、慈悲の佛は温容接するに易く、清き慈悲の光を放つて衆生を濟度し給ふので、之を月愛の光と云ふのである、前述の如く眞の佛陀と女性とはよく似て居ると思ふ、この點よりするも佛陀が女子に同情があつた事が知らるゝのである、佛陀の女子に與へらるゝ同情は、第一怖畏の心を除く點にある、怖畏の心は殊に婦人に多い、其は婦女が強ちに弱いからと云ふのではなく、其の優しみに乗する外界の壓迫が絶えないから、戦々慄々として常に不安の念に襲はれるのである、腹中女聽經に

女人常畏人 譬如鴛鳥蛇鼠蝦蟇 不敢晝日出

と説かれてある、夜中婦人の外出は甚だ危険である、大久保の出刃龜事件の事などは、諸姉の記憶から消えないであらう、文明國でさへこの有様であるから、無警察の土地に於て白晝掠奪の行はれる事は珍らしくなかつたのである、又吾邦の昔噺や物語などにも、道中や留守宅に於て女子の掠奪せられた例は幾らもある、故に女子が獨り街端れなどを行く時は、危険を感じ心中に無事を祈つて居るので、實に生れ落つるから恐怖は附さまたらうて居る、そして又斯うしたら他人に悪く言はれはしまひか、笑はれはしまひかと、恰も下婢や從僕の様子に恐怖をもつて居る、設へ身は王侯貴族の家に生れても、怖畏の心を脱し得ないのである、故に同經に

常畏人譬如婢僕 雖是國王女猶又畏人
と仰せられたのである、この哀れな有様に對して、佛陀は深く同情し給ひ、安心立命を與へんと思召したのである、大莊嚴法門經に

善哉菩薩無畏鏡

と説き給ひ、同經の中に於て金色女に對して

汝怖無能除 亦無安藉者 汝今當速往
如來大師所 汝之大怖畏 非父母眷屬
智識能救者 唯有二佛世尊 能拔其根本

と説き、汝の大怖畏の心は唯佛陀のみ能くその根本を抜き給ふ、速に佛所に詣で、無畏の施を享けよと慈諭し給ふたのである、又「婦人過宰經」を見るに、或時佛陀が舍衛國の給孤獨園に在らせられて狂女をお教ひなされた物語がある、或る婦人が嫁いでより二人の兒を挙げ今又妊娠したのである、懷妊すれば親里に歸り親切なる慈母の下に分娩するは印度の風習である、この婦人も良人に伴はれ俱に車に乗つて故郷に向つた、途中車をひく牛を息ませて草など飼つて居たが、何處から、不意に毒蛇が現れて牛を食はんとした、牛は見る間に斃されてしまつた、良人は驚いて之を救はうとしたが之も毒蛇に殺されてしまつた、妻は悲鳴をあげて教を求めたが周圍は曠原であつて救ふ人もない、毒蛇は無慘にも良人をくはへ何れへか走り去つた、婦人

は天に哭き地に嘆きつゝ、日も涙にかき暮れて詮方なく
 良人の死骸を後にして、今は父無し子二人の子をひい
 て心細くも行くこと暫らくにして、一の河に出會ふた
 橋もなければ徒渉せねばならぬ、そこで長子を岸に待
 たせ、弟を背負ふて徒渉しつゝ、中流まで来ると、岸に
 子の泣き聲がするから振り返つて星明りにすかして見
 ると、これは如何に恐ろしき狼が来て、今や長子を食は
 んとす、あつと驚いて引き歸らんとしたのが驚愕の刹那
 心氣を奪はれて、手がゆるみ、背へる子を思はず水中
 に墜して終つた、あはやと思ふ間に、激浪に浮きつ沈
 みつ流れ行く様、鴈もちぎるゝばかり、跡追つかけて
 手をのばしたが水底の石に足滑らせ、自分の命も危か
 りしが、自分のみは九死に一生を得て、漸く對岸に匍
 匍い上つたけれども、暗中の子は暗から暗へ逃つたら
 しひ、斯く重ねゝの悲嘆に遭つた婦人は、最早泣く
 に涙なく呼ぶに聲なく、たゞ夢中で故國へと路を急い
 だところが、路で一人の男に会い、この人に身の上を
 尋ねられたので、ありし不幸のまゝを物話ると、話の

に復したのである、さて婦人は心治まつて我身の醜態
 を慙愧し、佛は法衣を脱いで、阿難に命じて彼女に被
 せしめ給ふ、婦人は有難さに佛足を拜し奉る、佛陀爲
 めに法を説き給ふ、浮雲に似たらん富貴、霜露に同じ
 き人生に、無上の憑みとしては、信仰の力なくば、如
 何にして安穩を得らるべきと、懇諭し給ふ、彼の女機
 や熟しけん、頼に心靈の光を見て、心にかゝる雲もな
 く無上の法悦に住する事を得たのである、之を經文に
 は

憂愁除盡如三日無憂

と示されてある、女子の凡べてが、必らずかゝる辛酸
 を嘗むるにはあらざれども、女子は、元來の性質と
 して、多くの怖れを有するのである、若しも今良人に
 適かれたら如何にしよう、商業に失敗して、倒産した
 らどうしやうなど、殆んど男子の想像だに及ばぬ程
 些細な事にまで、取越し苦勞をして居るのである、ひ
 たすら信仰に依らねば、眞の平和にして、力ある生涯
 を送ることの出来難いものである、佛陀が、婦人の爲

濟むか濟まぬ間に彼の男、さすがにあはれを催はして
 か同情の言葉をもて慰めつゝ、且つ言ふ、汝の故家は
 火事の爲め去る日、両親諸共に焼け死なれた、と告げ
 たが、良人の両親の安否は如何にと聞くに、これは又
 有らふ事か、去る日の夜半、強盗に襲はれて老夫婦同
 じく惨殺された事を話され、一時に心も掻き狂ひ、髪
 振り亂して眞裸となり、ひた走りに駆け出す、されば
 逢ふ人毎に之を嘲笑す、中には同情する人もないでは
 ないが、助ける人として一人もありませんでした、然
 るに彼の女が、給孤獨園に走り行いた爲に、幸ひ佛陀
 の御眼に止まつた、佛はこの狂女を御覽せられていと
 も感れむべき失心の女よ、と大慈大悲の大御心より月
 愛の光を放ち給ふよと見奉るに、不思議や頼に彼の婦
 人の精神は落ち附き、重なる幾多の憂苦も消え去つた
 のである、茲に尊き事は、人若し佛陀の慈光に浴する
 ことを得ば、盲者は眼開き、聾者は耳聞え、病者は病
 癒ゆ、これ佛陀の大功德力より来る不思議でありませ
 今佛陀が彼の女に慈光を放ち玉へば、精神自然に平和

め、特に同情を垂れ給ふ所以は、全く此に在るのであ
 ります、されば佛陀を、施無畏者と讃し奉るので、女
 子に唯一の味方であつて、精神の平和を保つ、強き力
 を與へ給ふのである。

凡そ、人事百般の事は一つ契へばまた一つと、苦の絶
 える時なく、家庭が平和になつたかと思へば、親類に
 紛擾が起る、生活が安全になれば、病氣に罹ると云ふ
 有様で、この缺點多き人生なれば、信仰に生くるより
 外、眞の平和は持續せられないのである、されば宗祖
 は「苦樂俱に思ひ合せて、但前無妙法蓮華經と唱へ奉
 るべし」と仰せられて、苦に遭ふて悶えず、樂に遭ふ
 て淫ぜざる程の、靈力を持つて居らなければならぬ、
 感冒にかゝり易い人が、重ね着をなし、頸巻をするが
 それよりは皮膚を壯健にする事が、大切である、その
 如く、信仰によりて、精神を健全に鍛はされれば、必ず
 一生を通じての幸福は得らるべきでない。
 佛陀の同情は第二に自由を得せしめ給ふ事である、自
 由の事はお經には自在と云ふ文字が用ひられてあるが

自由と云ひ自在と云ふも同じ意味である、玉耶女經に

自生至死 不得自在

と仰せられてある、幼にしては父母に従ひ、長じては夫に従ひ、老いては子に従ふ、この三従の説は玉耶女經に説かれてあります、佛陀はこの束縛から救ひたいとの憐れ深き思召である、今日の極端なる自由結婚をば許されたのではないが、たゞ徒らに束縛せられたのでもない、結婚に就ては摩訶伽藍に

婚姻之法須自父母

と説かれてある、佛弟子中の好男子と云へば阿難尊者でありますが、摩訶伽藍が見染めて戀々の情に堪えず、遂に佛陀に、結婚の聽許を願ひ出た時、佛陀は、今の語を以て、汝が父母の、承諾を経べきであると仰せ玉ふたのであります。

由來印度は、上下階級の、墻壁の酷しい國で、大體四種に分たれて居るが、一階上級の、社會に對しては、結婚の希望どころではない、下級社會に對する壓迫は

る娘に一碗の水を乞はれたことがある、其の女が、即ち摩訶女であります、彼女が云ふのに、水を差し上げるは、いと易い事でありますが、妾は下級の種姓であれば、高貴なる刹帝利種なる貴僧が、この賤しき女の水を飲まれたならば、今四圍に見て居る人達が、如何に嘲笑するか解りませんと申し、之れを聞いた阿難尊者は、左様な次第ならば、猶更貴女の水が戴きたい我師主釋迦牟尼は、斯かる弊習を一掃して女子の地位を保護せんとの思召であるから、佛弟子の眼中には階級はない、サアその水をと、鐵針を差し出しましたから、彼女も、清水を汲み上げて、供へたのである、阿難は、恭しく之れを拜して、衆人環視の前に於いて

飲みほし、左右を顧みて、説法を始めました、抑も四姓の區別を立て、婆羅門種が最上級であるとして威を逞ふするは、婆羅門教の傳説より來る妄誕不稽のことである、婆羅門種は神の口より、刹帝利は肩より、毘舍は腹より、首陀は足下より生れたと云ふが實に不合理なる神と云はねばならぬ、人には自作自受の原則

恰も昔時我國に於ける、種多族に對するが如き状態で又男女の分限も、甚だ無法を極め、良人が死んだ時は其妻をも生きたまゝ、共に市街の中央に設けられてある、茶毘所に於て、火葬に附する、慘劇を敢てする程であるから、婦人の人格は認めない事は、無論である、近世は、大に覺醒する者もあつて、ある婦人の如き、大革命を擧げやうとしたが失敗に終り、現今、英國の領土となるに及んで、漸く法令を以て、禁せられた、併し今日でも、市街の中央に、火葬場が設けてある、されば佛在世の當時に於いて。婦人に獨立の人格を認めない位は勿論、その壓迫の甚しかつた事は、殆んど想像に餘りある次第であります、然るに、佛は、この階級的積弊の中に於いて、四姓の階級を打破し、男女の平等同位たる人格を認められたのであるから、この社會改良の困難事たりしは云ふまでもなく、佛陀が婦女子に對する、同情の如何に深かりしかを、窺ふに足るのである、之に就いて一の物語がある、例の阿難尊者が、托鉢に廻られた時、渴を感じ、水を汲んで居

に由り、果報があつて、賢愚貴賤の等差を生じたのである、若しも神が斯の如き、生み方をしたのならば、依怙最負の偏頗なる作用と云はねばなるまいと、堂々理路を立て、説き去り説き來つて、女子の爲に、大氣焔を揚げた、群衆中には、一言の反對をする者もなかつたのである、これは有名なる説話であります。

佛陀は女子の味方として、滿腔の同情を表し、四姓の階級を打破する上にも、特に女子の壓迫を改革する意味があつたのである、言ふまでもなく、四姓の階級制度は別して女子の爲め憐むべき事情が存して居たのである、甚だ卑近な言ではあるが、戀には上下の差別がない、男女の關係は、真正なる愛より成立するのである、印度の四姓の如き、極端なる墻壁を作れば、男女の結婚は適當に行はれない、又た古來、色は思案の外と言ふがこの利害を離れた所に、一分社會の緩和を保つ益があると思ふ、提婆品に、女に五障ありとの思想を、打破せられて居るが、この五障の説は、婆羅門から移植されたので、純粹佛敎の思想では無い、一に

は梵天王、二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身、この五つの位には、女子は成れぬと云ふ説でありますが、法華經に於ては、八歳の龍女さへ、最高の佛身をば、而も一刹那に、成就する事を得たのである、佛身を成就する程なれば、梵天王位は易々たる事でありませぬ、で提婆品は、婆羅門教に於て、足下に踏みつけられて居た、女子の位置を、一時に、佛界の絶待位に、引上げたのであるから、女性觀の大革新である、されば智積菩薩も、舍利弗も、一會の大衆、悉く堅然たらざるを得なかつたのである、女子が、人生に多大の貢獻をした、實例は實に澤山ある、女子の自覺を喚起するは、現代に於ても急務である、孝養の如きも男子よりは、女子の方が、能く身を盡して、事へるのである、義勇にしても、忠節にしても、良人が躊躇して居る時は却て妻が大義を説いて諫諭し、其去就を決せしめた事實は甚なからぬのである、宗祖が、一婦人に對し、日妙上人の號を與へて、敬稱されたのは、實に千古の美談と云ふべきである、男子すら

行かない、佐渡が島まで、訪ねて行つた精神に感せられたので、如斯氣力も、たい日妙上人に、限られたものでは無い、啓發と、獎勵さへすれば、多くの女子は、この勇氣を有つて居るのである。佛陀の同情の第三は垢穢を離れしめ給ふ事である、印度でも、日本でも、古來女子は、穢れたる者と考へ、吾邦の神道などでは、婦人月經の時は、穢れて居るから、神前に詣ずる事も許さない、又男子が、一世一代の大事でも、成さうとする時は、女子の穢を斷たなければ、成就しないものと考へられて居た、併し宗祖も月水御書に
在世の時多く盛の女人尼になり佛法を行せしかども、月水の時と申て嫌はれたる事なし、是をもて推量り侍るに、月水と申物は外より來れる不淨にもあらず、乃至人の身より出づれども能く淨くなしぬれば別にいみもなし云云
と、仰せられた如く、設い肉體より出る穢はあつても、精神は、全然別問題である、仍て、佛陀は此の謬想を

打破するを急務とし、種々に力を盡されて居る、離垢施女經、得無垢女經、無垢賢女經等を見よ、此等の經は、女性を垢無しとせられたのみならず、明智を得べき由をも、説かれてある、法華經の提婆品に於ける、女人の成佛せし國を、無垢世界と名けられたが、女子に穢なしとの意である、佛陀がかく、舊來の思想に反對せられたは、決して無意義ではない、其處には充分の理由がある、女子に全然穢がないとは云はぬが、其を擧る日になると、男子にもあるから、畢竟五分五分である、故に女子たりとも、信仰に依りて清め得ば、無垢たり得るは無論である、女子の垢穢に就て、佛陀の數へられたは何であるかと云ふに、第一が放逸である、放逸とは横着すること、何時もだらしなく身を持ち崩してふら／＼して居る、之を離垢施女經には

塵欲如火多有放逸
と仰せられたので、無論放逸は男子にも多いが、女子にも多いから之を除かねならぬ、摩訶伽經には
汝今宜應三精進、慎莫三放逸、

と諷められて居ります、次には貪慾である、虛榮心である、分不相應の生活をしやうと思ふから、法外に貪る心がある、三には慢心、四には偽り騙すこと、例せば、今日は少々頭痛が致しますからなど、云つて、實は眠むたいのであるから、蒲團をかけて、寝込んで居るやうな始末、かやうな事は、少なからぬ様でありませぬ。
除其慢心、離於欺誑、不作幻惑、
と、轉女身經に教へてある、五には云ふ事が浮いて居て、眞面目でない、からかい半分か、談話のやうなところが多い、六には、人に依つて甚だしく好き嫌をする七には、始終無理な難題を吹きかけて、人を困らせる、八には、兎もすると自暴自棄になつて、始めのやさしみは、何處へやら飛んでしまふ、先づ主なもの、此等でありまして、諸姉に於ても、時々實驗して居られる所だと思ひます、併し前にも言つた如く此等の性僻は決して先天的のものでない、必ず矯正し得べきものである、轉女身經には

不自大、除、僥倖、敬、尊長、取、言必實、無、嫌恨、不、能言、不、難教、不、貪著、不、暴惡、不、調戲、と讃めて居られる、全く矯正の段になると男子の方が却て人の意見をも容れないから至難の場合が多いのであります。

婦女子の精神的垢穢は斯くの如くであります、又は地獄に墮つる原因の多くは就中嫉妬と我儘にある、佛陀は七女經に

女人所以墮泥梨中、多者何、但坐嫉妬恚態、多故

と指摘せられてある、全く婦人は何か他人の善行とか幸運とかを聞くと、直ぐ兎や角と難辭を附けて中傷する、反之他人が不慮の奇禍を受け又は悲運にでも逢ふと聞くと、人前では同情する様ではあるが其實は喜んで居る、此は即ち嫉妬であります、又恚態とは即ち氣まゝの事で、實際女子は自分の氣に合はぬ事でもあると直ちに自暴自棄な捨鉢的なことをする、それと云ふのは今一、辛棒と云ふやうな大事の處を耐らへて踏み止まる力がないからである、故に斯の如き點さへよく

矯正して修養したならば、玲瓏玉の如き人となるのであります、玉耶經に

人誰無過、善改者、善無大過

と諷されてあります、此文の前後の意味から拜すると男子よりも女子が改後に早いとの義であつて、提婆品に龍女が、成佛の時を、於刹那頃とて一彈指よりも速であつたとあります、然れば則ち女子が垢穢を除き去るは最も容易な事で、又直ぐに出来る次第と信じます。尙ほ述べたひ事は澤山あるが最早時間がありません、要するに女性には怖畏の心が多い、されば誠の信仰を求めよ、安慰を得、無畏の地に住せん、又壓迫多き者は自由を與へ、又垢穢多き心には之を除き去らしめ、清き生活、安らげき生活、力ある生活を與へ玉ふのが佛の御心であります。(つゞく)

會式に對する所感

(十一月二十日妙典研究会外六) 團體主催會式の講演筆記也

村雲婦人會委員長 松森靈雲師

本日は、妙典研究会外五團體が相寄られまして、日蓮上人の御會式を營まれるので、小笠原子爵並に本多大僧正の御講演もありますが、私は只村雲婦人會委員長として委員一同に代り、五分間程お悦びの意を申し上げる考であります、過般松本君が參られて、本日の會式に就て常林寺の門を入ると、先第一に松に葛蔓を始めてとし提燈藤の花、悉く意匠を凝らし色彩を施したもののばかりであるから、其お考で御注意を願ひたいと云ふ事で、お招を受たのであります、そこで私は考へたのであります、自分で意匠とか或は色彩といふことを考へて見なかつたならば、當に今日のみならず世上百般の事皆悉く無意味なるものとなつて了ふものであらうと思ふ、然るに一單注意して見るならば、山川草木禽獸虫魚、宇宙の森羅萬象は悉く何等かの意味

を有して居ないものは無いといふ事が明らかに判つて來るのであります

光格天皇の御製にも

敷島の大和錦に綴りてこそ

からくれないに色もはえあり

とあります、朝鮮の様な國でも日本に合邦せられてこそ始めて立派な國となるのである、彼の林子平が日本橋に立ち下を流るゝ濁水を見て、是も遂には渺茫たる大洋に出で、清らかなる一大潮流となるのであると云はれたさうであります、私は非常に意義ある言葉であると思ふ

日蓮主義は、悉く意匠主義であります、要するに物といふものは美化すると、如何なるものでも深き意義を有するもので、彼の東京のお會式で高懸高く掲げ太鼓柏子木で、一貫三百ドルデモヨイとの調子で行く處は丁度在者の様でもありお祭り騒ぎの様にも見えて随分滑稽であります、併し私は彼の中にも一種の尊き意義があると思ふ、遂二三年前の事でありすが彼

の有名人、ラッド博士が來られた時丁度池上のお會式で、狂へる如き満山の講中連及び信男信女を見られた。そこで或人は博士に向ひ其感想を問はれた、すると博士の云ふのには、實に日蓮の偉大なる感化は、萬人殆んど狂氣の如くなり我を忘れて其高德に憧れる其衷情に私は深く感じたといはれたさうであります、先づ十月になると、何れの寺のお會式でも萬燈或は高張提燈に團扇太鼓の音凄まじく講中連等が後鉢巻で狂態を演じて行く處は、實に亂雑を極め八ヶ間敷感じますが、併しよくよく考へて見れば其中にも亦崇高なる意味が含まれてあると思ひます其狂へるが如き者の身分を調べて見たならば、家には妻もあり小供もあるのであります、又時に職人等では其日々の生計も豊かならず、辛ふして細き煙に月日を送る者もありませうに、夫が上人の高德を敬慕するの餘り、萬燈を掲げ太鼓拍子木で、上人の下に參詣する其間丈は、最愛の妻を忘れ子を忘れ家庭を顧みず有ゆる煩悶苦痛を脱して居る其清き心より推せば私は萬燈成佛論も立と思ひます、

である、清澄山頭松風颯然たる中に立ち給ふは無邊行菩薩の意匠である、又上人が眼下に見渡されたる太平洋の潮は直に太西洋に通じ世界に通せる清らかなる水で、之は淨行菩薩の意匠で、立ち給ふ森は即ち金剛の寶坐で安立行菩薩の意匠である、上人の宗旨建立は即本化の大菩薩たるの大意匠で、草木國土悉皆成佛の深意を有する、斯くの如く數へ来れば上人の御一代は悉く意匠を以て満された事が分る、彼の文永八年龍の口の御難の際述べられた御文に

若然者日蓮が難にあふ所ごとく佛土なるべきか、娑婆世界の中には日本國、日本國の中には相模の國、相模の國の中には片瀬、片瀬の中には龍の口に、日蓮が命をとめをく事は法華經の御故なれば、寂光土ともいふべき歟

と仰せられたのも此首切らるゝ場所が即ち本國土であるとの意匠でありませう

是に依て考へて見まするに、此の常林寺内の一坐は虚空會即ち空大である、然して此中に敬愛の態度を

日本でも日露戦争の時等盛に提燈行列をやりましたが、私は此萬燈行列は其最も進化したものであるまいかと思ふ、何れにせよ喜は喜相應の眞情を現はすのは必要な事であらうと思ひます

そこで今日此六團體が相集まられて六百年の昔に還り、櫻花を造り、又御聖文に依て藤の花を造り、種々に意匠を凝らし色彩を施された此のお備は上人も定めし御満足のことであらうと思ひます、又熟考へて見まするに上人御一生も悉く意匠を凝らされたるもので建長五年四月二十八日、始めて清澄山頭旭が森で唱題せられたのも亦一大意匠である、今本化四菩薩の徳を擧て申すれば、上行菩薩は火、无邊行菩薩は風、淨行菩薩は水、安立行菩薩は大地、釋尊は空大を表せられたもので、之は實に五大意匠とも申すべきものであらうと思ふ、今之に依て上人の事を考へて見まするに旭日に向つて唱題せられた御主意は旭日が堂々として出づれば凡てのものが光を失ふ事は、火の物を焼き盡すが如くであるといふ、上行菩薩の火徳の意匠

以て赤心をこめて居らるゝのは、上行菩薩の意匠である、意匠の松は無邊行菩薩の將來、諸君の清らかなる心は、淨行菩薩の心であり、此道場は淺草清島町で餘り奇麗な所でもありませんが、即ち是道場である、言葉を換へて申すれば、如何に不潔なる所にせよ、此一會はさながら安立行菩薩の寶坐である、今日六團體が相寄られまして赤心をこめて此大會式を営まれる、是を私が松本君のお考より推して意匠を申するならば、娑婆世界の中には日本國、日本國の中には武蔵國、武蔵の國の中には東京、東京の中には淺草、淺草の中には北清島町、常林寺こそ、寂光土ともいふべき歟で、此寂光土の中に異體同心以て此お會式を營れる、至誠熱烈なる諸君の心は纏て發展して、一天四海皆歸妙法の實を擧る事は疑ないと確信致します、で今日は松本君の懇篤なる御注意を以てお招に預りました、其お祝として一言爰に申述べた次第であります(元)

(文責在記者)

會式に對する所感

(十一月二十日妙興研究會外六)
團體主催會式の講演筆記也

子爵 小笠原長生君

上人の御遺文中に「此國より西に當つて百濟國と申す國あり、此國は日本大王の御知行の國なり」といふ文が有ります、又之は極名高いお言葉であります、「日本は月氏漢土にも勝れ」と仰せになり、或は又「佛法必らず東土日本より出づべし」と仰せられました、今日から數へますと、上人の御入滅後丁度六百二十九年になるさうであります、其連夜に當りまして妙興研究會外六團體が聯合して、此に模範的大會式を営まれますのは、誠に敬祝すべき事で、夫に付私にも何かお話をされる様にとの事でありましたが、私は一向不心得で實は再三再四お断を致した次第でありましたが、松本幹事の申されるのには、倫理と宗教とを一貫せる一大教義であるから僧侶の方ばかりでは權衡がとれぬ故に是非俗人の代表として、私に出でくれといふ事で

ありましたから、私は上人の檀徒といふ關係からお受を致した次第であります、併私の罪深い故か先般來から氣管を傷めまして、本日の演説もどうかと存じまして醫者に尋ねた處が、十五分か二十分位迄ならばよからうといふ事でありました、是も只夫丈に聞けば何でもありませんが、私は此短時間にせよといはれた事により一種の教訓を得たのであります

先に松本幹事及び松森師も云はれた通り、一度注意を拂へば如何なる事でも深き意義を有するので、是が又法華經主義で、お經文には、信念を以て行へば悉く正法に順ずるとあり、見るにつけ聞くにつけ正しき信仰を透し、主觀的に考へて觀念に觸れしむるならば、法華經の信念と同一の功德を現はさぬものは、一としてないのであります、今日此お會式に就て色々澤山の意匠を凝し、色彩を許されてあるのも、法華經といふ色眼鏡を透して見て、始めて意義を有し感にも打れるのであります、私が今日醫師からいはれた事も亦是と同じく、法華經の信仰を透して見て始めて醫

師の言其ものが、何となく一種の教訓を與へられたが如く感するのであります。

凡そ何事によらず意義を以て見れば法華經と同様にならないものはありませんが、併し之は法華經といふ本體より出づる作用で、花を作り飾りとする、夫が直ちに法華經主義であると誤解してはならぬ、然らば其體とは如何なるものであるかといふと、喩へて見れば天の一月の如くで、此一月が一度び働き出すと實に千萬無量の形を映するのであります、故に働きの方面よりも先以て其本體を捉へる事が、極めて大切である事を忘れてはならぬ、尙之を他の方で申すれば、大曼茶羅には十界色々のものがあります、其中央には南無妙法蓮華經とお題目がある、之が大曼茶羅の中で一番大事なので、十界は此南無妙法蓮華經に依て統一せられて居るのであります、故に此南無妙法蓮華經を捉へる事が大切なので、之は信仰より入るものと、理論より入るものとを問はず、均しく此に歸着せねばならぬのであります、が併し之には必ずしも多を望まない

ので、多を望むと稍もすれば、粗雑なる信仰に陥る弊害があると思ふ、先刻松森師が云はれた萬燈成佛論も御最の説と存じましたが、要するにそれは作用の方面で、體と用とは能く區別して心得て置く必要があると思ふ、今申す通り數で行ふとすると、往々にして無意義に終る事が有り勝なもので、斯かる多きは日蓮主義の大禁物であります、稍ともすると此弊害に陥り易い、又演説等するにも私共は、材料が乏しいから勢ひ數でこなさうと致しますが、之は甚だ宜敷ない事と思ひます、故に私は諸君にも決してお勧め致しません、最も本多大僧正とか、松森僧正等は除外例で、長い程愈以て其本領を發揮せられるので、曾て釋尊が御在世當時靈鷲山で長々と説法をせられた、然るに聽衆の方では極めて短日月に感せられたといふ、松森師は最初演壇にお立になつた時は、約五六分と云ふ事でありましたが、其實は二十分お話になつた、夫にも係はらず誠に短かく感せられたのは、多年の信仰により鍛錬せられた人格から湧出づる言葉であるからで、之が

私共であると僅か五分か六分の話も、お聴になる方には、二十分にも三十分にも聞ゆるのであります、之といふも無闇に數でこなさうとするからいけないので又聴衆の方も只私のお話として聞くから、無意義に了るのであります、要するに演者も聴衆も共に法華經といふ色眼鏡を透した上で無ければ、利益になるまいかと思ふ、本日此のお話も上人のお考が醫者を透して、私に與へられたものと衷心より感じ、此に其言葉をお傳へするのであるから、之を私は非常に難有く思ふのであります、只今申上た通り上人の主義は決して雑多を望まない、南無妙法蓮華經を以て一貫せる一大教義である、故に此南無妙法蓮華經と云ふ中心を失つたならば締りといふものは一もない事になる、上人の國家主義は決して斯かる締りないものではなく、確かに此統一主義であらざられた事を忘れてはならぬ。

更に信仰上の事に就て一言申上ると、彼の有名なる波木井抄の中に、

日蓮が弟子檀那等の中に、日蓮より後に來り給ひ候はゞ梵天帝釋四天王閻魔法王の御前にても、日本

第一の法華經の行者、日蓮房が弟子檀那なりと、名乗て通り候べし。心に二つましろして信心弱く候はゞ峯の石の谷へころび空の雨の大地へ落ると思食せと仰せになつてあります、此二つの心といふは唯二つに止まらず、直ちに千萬無量となるのであります、上人は深く戒められたのであります、先程吉田幹事の讀まれた異體同心の金言の如く、六團體集合の中には、老若男女職業亦千態萬様で、從つて其信仰に入た動機も異つて居ませうが、均しく日本國民として此大法に浴して居るので、億兆心を一にして進む其模範も、先以て此六團體でなければならぬ、之が一になつて行には南無妙法蓮華經に歸依し奉る事により異體同心の働きは自然に現はれて來るものであると固く信じます、先に松本幹事が言はれた通り、一度此同心の徒が集り推し及ぼしては億兆の美をなし更に世界に波及したる時が、所謂一天四海皆歸妙法の目出度い時であると思ひます。

以上私が短時間に申上た事も、法華經の色眼鏡を透しての所感であります。「完」(文責在記者)

報道

理想的の御會式

(六團體合同舉行)

▲京都の名勝たる春は花吹く東臺の森を東に扣へ、西には都門遊覽の一各所たる淺草公園を扣へ、此の中間に來往路として淺草人馬の音を絶たず、去來の電報は間断なく轟々の響きを送りつゝあり街衢のほとりに、一堂宇がある、これ淺草清島町の日蓮主義會堂である、電車に乗じて此の處を通過するものは其の門前高く、第一義會講法會、妙教婦人會日蓮主義青年會、法華經講法會等の講演看板が掲げられて不厭に人目を惹きつゝあるを見るであらふ、阿彌若の構造太々後隆にして朽靡に近きの感なき能はざるも、唯獨り、中央に一段高く翻請せられたる、緋紙金泥の大本尊のみ、圓浮統一萬年裏布の光りを誇つて居る此の道場こそ大齋正本多日生師が、宗内知名の碩學賢師を率ひて、所定の日時に於て、講話講演を興し、常に潮の如く雲の如く四方より集る男女の爲め、知導者問導者設導者となりて、正義純淨の信仰を傳へて居るところである、今より二三ヶ月前の事であつたが、能化の師、所化の居士等の間に聖觀御會式の話が出て種々議論の結果、御會式といへば、萬燈、太鼓、鐘杵などいふことが多く聯想せられて、何となくも報恩謝徳の誠意といふような事は浮ん

で來ることが少ない、それでどうウツシニミとした、狂喜な、歡喜に満ちた、そうして報恩の誠意の籠れる模範的理想の御會式を舉行して見ようといふことに相談が一決し、そこで各團體中より委員を推定し諸校の準備方法等を協定し、其の期日は十一月二十日が推歴で十月十二日に當り、即ち御入滅第六百二十九日の御遺忌逢夜になるから、此日といふことに決定した、そうして其の發願者は、東京市内の辯護士、陸海軍將校、高等文官、實業家等より組織せられて居る、妙法研究會、妙會、第一義會、妙教婦人會、顯本協會、日蓮主義青年會の六團體の協同舉行といふことで此の意味と式序とを記した案内状を廣く諸方面の人士へ發送した。

▲十一月二十日に於ける當日の裝飾は亦一々法門の意匠を凝らしたもので、なかゞ、振つて居た、會堂の門前には、紅白の布を以て包みたる大きな鳥居形のアーチを建て、華太に墨墨々と「立正安國」の四大文字を顯はしたる大額を掲げて、先づ日蓮主義の主張を示して幾多行人の眼を驚かし、門扉には紅白の機軸を垂れ、當日の式次を掲げたる揭示場には、特色の経木モティーの間に紅紫の花を點したる裝飾を爲す等、入口からして美麗と典床しさを并び備へて居る。

門を滑ると一本の枝より面白き松の樹がある、これには造花の萬葉が鐘撞と見えがふばかりに秋色を示して霜み附けてある、其の枝には君難松松願延子尋と安國論の名句を認めて下げてある。

庫裡の方には紫縮緬の幕を張り其の傍の葡萄棚を利用して、造花の蔭を蔽ひ、之を閑宗布慈と命名して建長第五の年を追憶せしむる中に、萬年教護の大慈悲を偲ばしめた。

これより數歩隔てる古井戸には、其の傍に楠樹に擬して累々として實を結べる蜜柑の樹を其まゝ樹て、宗宗に見立て「福香萬年に萬す」の文字が記されてある。

左方の空地には、劍と筆と哺乳器との形をした素ばらしい大きな旗行燈がある、劍形の行燈には「妙法五字の劍を掲げ燈門をかつげと破り」の聖語を記し、筆形の行燈には「三千界の草木を筆となすとも法華經の功徳は盡し難し」の聖語を、哺乳器形のものには「是れ即ち母が赤子の口に乳を入れんとはげむ慈悲なり」の聖語を記してある。

上を見ると日章旗を中心にして無數の萬國旗を縦横に張り、圓浮統一萬海新妙の理想を示し、日蓮主義の大地眞を教へて居る。

本堂の正面には慈壁を撤し庭木を取り圍みて三間に五間の張出を爲し、テントを張り、紅白の機軸をめぐらし、既に落葉せる楓樹には楡頭に數多の花を點じて、櫻に擬し、入滅當時の秋手腰とも見るべく、日本魂を示し王傍冥合の理想とも見るべく、又枝上に一羽の白鳥を吊るし「山がらす頭も白くなりけり我がふるべき時や來ぬらん」と記し佐渡在島正宗顯本の法義を示して居る。

▲堂内に入れば、教華實華の意にて、天井一面寶前及び隅々に至るまで、紅黃白紫の造花をのこる隈なく飾り附け、百花爛漫たる春の

園に遊ぶの心地あり、實前には山海川陸の珍味三十餘種を以て、須彌山の四山八海、靈山の機容等に形どれる生御膳御盛物の、清巻にして而も教訓を寓したるあり、又久富辯護士夫人中西令嬢の菊花及び菊造りに名高き矢野大書院検事より手作の菊花数枝を供ふる等は床しき中に深信の心根を信ばしむる等に、從來の御會式の裝飾とは、大に其の趣を異にし、總て理想的莊嚴であつて、無信のものも一たび此の堂に入れば自ら清淨の菩提心を喚起する。

▲時辰定刻二時を報するや、一分も遅れず鳴鐘の音につれて式が始まる、委員岡田養叔師の開會宣言と共に十三四歳を頭にして八九歳までの一隊の少女が可憐な装ひを爲して、オレガンを取捲きながら若々代を合唱し澄んだ聲は森として堂内に響き渡り先づ人の心を清ふする。

發願文

南無本門常住ノ三寶諸尊護法列位ノ諸天善神南無本佛別付末法護時ノ大導師日蓮大聖人來臨影響知見照覽
 護テ健シテ大聖人ハ佛ヲ奉シ五濁惡世ノ末法ニ出現シテ一切衆生救護ノ爲メニ大德教ヲ示シ建現宗テ朝ヨシ弘安第五ノ夕ニ至ル迄四箇ノ大難無量ノ小難ヲ忍ビ玉フ嗚呼其恩ノ洪大ナル何ヲ以テ之ニ酬ヒ奉ルコトヲ得ンヤ今ヲ大聖人非滅現滅ノ涅槃ヲ示シ玉フテ

る。(日篤居士、物情庵主、合記)

◎實業青年修養講演會 岡田養叔氏が主任講師として、東京市内の商工業青年子弟を廣く教化啓蒙しつゝある徳教青年會の事に就いては嘗て本誌前々號にも報道したるが其の後も引續きて同會本部淺草南松山町法成寺に於て毎月二回一日十五日夜を以て本化の大徳教を基礎とせる實業青年精神修養講演を公開し此外に毎月一回十日夜を以て修養研究會を開きて會員の信仰上其他の疑問を解決しつゝあり講演會の如きは各種方面の青年集り來り追々聖祖の人格を敬慕し本化の純信仰を味識せんとするものも生じ目下前途有望の状況を呈し居れり、左に九月已後の諸題等を掲ぐ

◎九月一日午後七時半開會

一、將來之日本 講師 岡田養叔氏

◎九月十五日午後七時半開會

一、上下心を一にす 同上

◎十月一日午後七時半開會

一、模範的人格 同上

◎十月十五日午後六時半開會

一、修養所感 文科大學生中川亮氏

◎十一月一日午後六時開會

一、知恩報恩 中川氏

一、権信権信 岡田 講師

▲歳ヲ閱スルコト六百二十有九柱ニ妙興研究會講妙會第一義會妙教婦人會願本協會日蓮主義青年會協同シテ法蓮ナル會式法要ヲ修行人ニ奉シテ報恩謝禮ノ萬分ニ報シ奉ルコト共ニ此清淨ナル法蓮ノ下ニ齊シテ異體同心ノ實ヲ擧ゲ進シテハ御門下各教團ノ合同統一ノ實行ニ努力シテ速カニ玉佛冥合四海歸妙ノ善ヲ迎ヘンコトヲ期ス

明治四十三年十一月廿日

委員總代 松本太郎敬白

更に會衆一同に向ひ一場の式辭を宣ぶ
 再び前の少女等が現はれて「おのづから」「立ちわたる」等の宗歌を太鼓に合せて節面白う歌ふ床しと床し
 次に來賓より村雲婦人會委員長松森靈雲師の法話吉田辯護士の通書異體同心抄捧讀、海軍大佐小笠原子爵の講演あり、最後に大僧正本多日生師の一時間半に渡りたる知恩報徳の設教を爲し、「蓮の葉」の宗歌と共に講演を終り暫時休憩と共に演奏に移つた。

「圓淨統一をまつたけ飯」(康直流法)「苦難き心とん」(妙法蓮華)「権門しいたけ(蓮化)」等の清麗な二重の折詰辨當となし、これに日宗新報寫眞班たる佐藤茂八氏講義の「法の華」と題する御一代記に因る中に蓮花形、并術に種、蓮形の菓子一同に配布した、此の菓子は云ふまでもなく、秋葉櫻、宗草及び蓮波度時の鐘を表するのである。

一、信仰ヲ求ムルノ道 同上

本會には重原盛太郎、荒井牛次郎、西川松三等の青年が幹事として、會費の收支、廣告會場との設備等諸般の會務を處理し、岡田講師と協力して會の發展を圖り居れり、本月一日監布布教師野老範馬師も隨行川崎英道師と共に東北布教の途次懸々立寄られ講演會の状況を視察し、大に効果あるを認め他地方にも此種の講演會を奨励したき由を語りたり、

◎八日本壽寺開堂式と御親教

青森縣八戸町本壽寺に去る明治二十四年五月不幸にして類焼の厄に逢ひ堂宇並に什器悉く灰燼に歸したりしが、現在縣中田量叔師首め信徒一同協力して再建に志し苦心慮らざりし結果漸くにして明治四十年一月再建工事に着手し四星霜の歳月と約一萬圓の淨財を投じて今回同地方に見る莊嚴なる堂宇の建築竣成したるに付管長本多大僧正親下野口龍正開田實都石川孝誠渡邊元教師等を請して盛大なる開堂入佛式を舉行せり今其の顛末の概要を記さん

▲管長親下一行の御着 管長親下一行は十一月十日八月着の乗定にて、住職中田量叔及び先發として同地に在りし開田養叔兩氏外植家總代人三名は尻内御迄、これを迎ひて、管長親下一行に合し、同午後三時八戸驛着、同地方檀信徒は停車場前に老若數百名を爲して之を迎へ是より「歡迎管長本多大僧正本多日生親下御一行」「本壽寺檀信徒中」「南無妙法蓮華經本壽寺講演中」と筆大に大書せる二流の旗を

▲晚餐畢り午後五時半開堂式の奏樂と共に鄭重なる法要を始め本多大僧正の導師にて、僧侶異口同音に方便品壽量品勝力品を讀誦し、野口龍正の慶讚文讀誦、唱歌聲裡に、委員總代として松本辯護士、各團體代表者として小笠原子爵岡田母室及夫人、田中外務總務官野外務書記官、吉田海軍中佐、新宮一等主計吉田、牧野 泰尾、久富、榮時、各辯護士、及吉田人等の姿を終り午後七時半芽出度會した

▲法談として此回の會式中に特筆すべきことは、色々あるけれども、各委員とも一同靈祖に對する報恩謝禮の誠意を表して、互に主伴となり、諸種の雜務に従事したことであつてフロンクコートの禮裝せる紳士が給仕や小使の如くにまめしく立働き、受附には鄭外務書記官や久富辯護士新宮主計官等が抑へて居て、來詣者の受附をやる横面を附ける下足の世話をする、そうかと思ふと羽織袴の小笠原子爵が令弟と共に頼りに擔當を一同に配つて居る、田中外務總務官や松本吉田の辯護が菓子を取る茶を注いであるく、一方には又小笠原子爵や松本君や其他の委員が新聞記者の接待を爲すなど之れらは恐らく他に於て見るべからざる光景であらう。

▲實に文明的理想的の御會式であつて、秩序整然然として而も歡喜法悦の氣堂内に滿ちるに況まらず新に走らず中滿を得たる中に、日蓮聖人の氣魄地氣も顯はれて、面白く奪く又何となく有難い會であつた、されば、二六、萬國國民、時事等の都下の各新聞が記者を派し記事を掲げて之を稱揚したるも尤もな譯であらう

先頭に押立て親下一行及び檀家總代各々腕車を列ね以下檀信徒一同これに隨ひて本壽寺に着したり
 ▲開堂入佛式 翌十一日に夜來よりの驟雨にて道路の濕しき事甚しく従つて婦女子の外出に極めて不便なりし故信男信女の參集遅かりし爲め多少時間遅延し午後三時其式を舉行せるが御本堂並に祖師御像奉送の行列は、檀家總代住職本堂奉持、天童、大導師管長親下、職員一同、一般檀信徒等の順序にて車程の方より繰り出し、較下を靜に本堂に入りて、兼て設けの御座に奉置し夫れより法要に入り、三寶禮、受持、回向、方便品自我偈、自願等にて散華を行ひたり
 ▲式文朗讀と焼香 前記の莊嚴なる法要修行に續きて先づ天童に裝へる十人の少女等は交る／＼白蓮華を寶前に獻じ天童一同を代表して前田きく子の獻花文を朗讀せり
 佛の光は世間の暗を照らし法華經の教は諸々の業を興ふ此開堂式の功德に依て二世の大願を成就せん事を祈る
 十一月十一日 前田きく子
 次で左記住職の開堂式辭檀信徒總代加藤庄五郎氏の祝辭及管長本多大僧正の慶讚文朗讀等ありて禮題の間に南都子爵首め來賓並に檀信徒一同の燒香あり回向文受持文にて開堂式終りを告げたるは午後四時なりし
 開堂式辭
 法華經本門常住式一切三寶護法列位ノ諸天善神來臨影響知見照覽
 初モ當山ハ明治二十四年五月五日祝融ノ襲

ノ所ト爲リ殿堂伽藍一初ニシテ鳥有ニ歸シ
寺門忍テ荒寒ヲ極メ檀信徒齊シク大ニ悲歎
ニ沈ミタリシガ徒ニ傍觀スルニ許サス途ニ
奮然起テテ堂宇ノ再建ヲ發願セリ不肖量叔
眞ニ教職ヲ當ルニ承ク此ノ慘憺ナル光景ヲ
默視スルニ忍ヒス佛天三寶ノ護念力ヲ仰ギ
異體同心ノ祖訓ヲ奉戴シ寺檀各々同心協力
シテ倍々奮勵努力ヲ加ヘ大ニ淨財喜捨ヲ四
方ニ勸募シ明治四十年一月工テ起シ歲月ヲ
累ヌルコト四星期今正ニ堂宇ノ竣成ヲ告
グルニ至レリ茲ニ本日ヲ以テ管長大僧正本
多日生親下ノ台座ヲ仰キ清淨ノ四衆相會シ
持ニ當山ニ對シ歷代信仰ノ縁故最モ深キ舊
藩主南郡子爵閣下ノ臨場ヲ恭フシ志ヲ開堂
入佛ノ式與テ舉グ

伏シテ惟ルニ勸請シ奉ル本尊ハ世界統一萬
民歸教ノ大受陀羅ナリ修シ奉ル法要ハ現當
二世所願成辦ノ大白法ナリ願クハ此ノ時業
ニ願キテハ佛三寶哀慈納受之御手ヲ垂レ
寺門長ヘニ繁榮シ法光十方ニ輝キ信檀檀越
等々法雨ニ潤ヒ現世ニハ諸ノ災難ヲ攘ヒテ
安穩ノ樂ヲ享ケ未來ニハ皆成佛道ノ大益ヲ
成セシコトヲ願ヒ以此功德普及於一切我等與
衆生皆共成佛道

南無妙法蓮華經
明治四十三年十一月十一日
正榮山十六代 本淨院量叔日登敬白
觀 文
維時明治四十三年十一月十一日正榮山本壽
寺開堂式ヲ舉行ス
回顧スルハ明治二十四年當山堂宇悉ク燬燒

◎開會の辭 中田 量叔師
◎宗教の妙趣 石川 顯隆師
◎法華經主義 關田 養叔師
◎寺 野口 日主師
◎宗教心の調整 本多管長親下
▲施餓鬼大供養 十二日午後一時より日清日
露兩役戰死病死者追弔と檀信徒先祖代々及法
界萬靈の爲め施餓鬼大法要をば、管長親下大
導師の下に勤終し終つて左の講演あり、聽衆
堂内に溢る

◎開會の辭 中田 量叔師
◎豐富なる生活 石川 顯隆師
◎佛教の第一義 關田 養叔師
◎宗教心の調整 本多管長親下
▲宗親會式 十三日午前十一時會式大法要修
行午後二時より講演あり聽衆の多き殆んど前
日の如し

◎開會の辭 中田 量叔師
◎嗚呼日蓮大聖人 石川 顯隆師
◎日蓮聖人と日本 關田 養叔師
◎活ける法華經 本多管長親下
因みに野口齋正は十二日青森に赴かれたり
▲現下一行の出發 十四日午前八時現下一行
は盛岡へ向け出發せられたるが三日間の大法
益を蒙むれる數百名の信男信女は早天より馳
せ集り停車場に群を爲して一行を見送り、亦
住職總代人十餘名は尻内驛迄隨伴して法益奉
謝の誠意を表したり

◎盛岡市の御親教
●管長親下一行の到着 別項の如く管長親下

ノ厄ニ罹リ堂塔俄然トシテ既種ニ歸ス我等
檀信徒一同茫然自失殆シド其ノ爲ス所ヲ知
ラデリシガ更ニ舊觀ニ復シ寺門ノ繁榮ヲ圖
ルハ我等外護者タルモノノ一重大責任ナレテ
知リ爾來感奮興起シテ住職及檀信徒各々一
致協同シテ廣ク寄附金ヲ募集シ指シテ四十
年ヲ以テ再建工事ニ着手シ今漸ク落成ヲ告
グ社壇給シト再觀ニ時シ我等ノ歡喜何モノ
カ之レニ過ギンヤ仰キ願ハクハ佛天三寶諸
尊大慈大悲ヲ以テ我等ヲ守護シ現世安穩後
生善處ノ大果報ヲ成就セシメ給ヘ聊カ蘇蘇
ヲ述ベテ祝辭ト爲ス
本壽寺檀家信徒一統代表
加藤庄五 耶敬白

慶 讀 文
諸而案スレニ本佛每自ノ悲願ハ暫クモ息マ
ス應用テ三世ニ垂レ利益ヲ十方ニ施ス故ニ
隨應遊化ノ日ニハ内ニ靈妙奪特ノ妙相ヲ包
ミテ總攝斯重ノ人中ニ降下成道シ續演說
窮リ無ク一代五時八萬四千ノ法門ヲ開示シ
五天ノ四衆賢聖賢賢等々法雨ニ潤フ遠處遠
ク萬世ニ輝キ伎尼ヲ照ラス滅後三千年佛陀
ノ尊容ヲ滿クシテハ舍利形像ヲ安置スルガ
爲ニ幾多莊嚴ノ殿堂ヲ造シ法論ヲ敬慕シ
テハ五千七千ノ大藏經典ヲ傳ヘ釋然トシテ
世界最大ノ宗教ヲ形成セリ嗚呼其ノ教理ノ
深遠高妙ニシテ願應感化ノ力ノ偉大ナルニ
非ンバ安ラズ此ニ至ラズヤ
當本壽寺ハ昔テ觀融ノ災厄ヲ蒙リ堂宇忽
チ鳥有ニ歸シタリシガ今再功被リ結構規
模殆シド前日ニ復レモ、如シ是レ實ニ寺

八戸へ御親教を幸禮とし、盛岡法華寺住職渡
邊元教師並びに檀信徒一同は、是非とも同地
へも立寄られ度旨熱心なる懇願あり、現下
には東京方面の布教多忙なるにも係らず、其の
熱心なる希望を嘉納せられ、八戸の親教を奉
り十一月十四日正午現下を首め野口齋正關田
當田石川學統等の一行は、盛岡停車場に着セ
リ、同寺住職及總代人其他檀信徒數十名車
を列ねて之を迎ひ、一時過法華寺に到着セリ
會式速夜法要と説教 十四日午後四時現下
には、大衆一同を將へて、悉しく會式速夜の
大法要を勤修セリ、此の時さしも廣き本堂に
は同市内勿論近郷近村より群集せる信男信女
を以て押切れざる程の光景を呈し異口同音に
唱ふる題目の聲は耳を聳ふるばかりにて其
の參詣者の數は數千人とも云ふべきなり、斯
くて夜に入りては、山門の入口により本堂前
まで道路の左右に宗親師一代記の掛行燈を點
じ、又境内庭園には残らず紅燈を點するなど
其の美觀云ふばかりなし、六時法要畢り、直
に説教に移リ

◎信心の要路 石川 顯隆師
◎御會式に對する信徒の心得 關田 養叔師
◎報恩謝徳 野口 日主師
◎法悦の實感 本多管長親下
の題にて、各々平易なる詞を以て深遠なる本
化の教義を説き、四方雲集の男女に多大の法
益を與へ午後十一時半閉會セリ
翌十五日は、前日に引續き、午前九時御會
式正當大法會を執行したるが、參詣者の數は

檀香ク異體同心ノ祖訓ヲ奉シ拮据經營ノ力
ニ由ラズンバアラズ則チ本日本日ヲトシ日生一
會ノ清榮ヲ督シ本化別頭ノ大法蓮ヲ張リ開
堂式ヲ舉グ
今中央ニ勸請スル所ハ佛教ノ經王タル法華
經本門常住ノ三寶護法位ノ諸天善神ナリ
此本尊ハ聖祖日蓮大士ノ光臨スル所ニシテ
自ラ一團淨提第一ノ本尊也ト讃シ兩祖日什
大正師ハ一たび此像ヲ拜スル擊ハ三妄執ヲ
一時ニ斷シ三善徳ヲ一念ニ證ス頓極頓證ノ
秘法ナリト歎ス然ラハ則チ息災延命ヲ請フ
ハ福壽喜ニ至ラン若シ至心ニ信樂セハ苦ヲ
除テ安穩ノ樂世間ノ樂涅槃ノ樂ヲ獲シコト
疑ナシ

仰キ願クハ三寶諸天冥ニ加シ顯ニ應シテ所
願成辦ナラシメ給ヘ更ニ請フ法論常ニ轉シ
鼻團長ヘニ榮ヘ檀信ノ祖先速ニ善提ヲ證シ
各々子孫長久家門隆昌ナランコトヲ天下法
界周迴利益無窮法華經
明治四十三年十一月十一日
願本法華宗管長大僧正日生親首々々々
▲大盛況 此日參集せるに舊藩主南郡子爵首
新團社員等の來賓並に檀信徒等無慮千餘名
にしてさしも廣き堂宇も立錫の餘地なく佛
前には加藤庄五耶加藤貞藏三井惣助其他の檀
信徒より寄贈のお備膳を首め菓子果實蔬菜等
を獻進しあり參集者一同には志飯及茶菓の饗
應ありて大盛況を極めたり
▲講演會 此日午後五時より講演會を開き左
の諸師順次登壇各々得意の雄辯を振つて法益
を與へたり

前日に異ならず、殊に大衆諸員の爲めに、講
員一同の現世安穩後生前處の大祈念法要をも
執行セリ
夕方より左の説教あり
◎佛陀の常談 石川 顯隆師
◎本門三大秘法 關田 養叔師
◎信心の中心 野口 日主師
◎活現せられたる法華經 管長 親下
各師が熱心せられたる法華經 管長、信男女の
胸奥に非常に響き響きを與へ教會に際し各々
口々に斯る尊とき説教は他にては聽聞する能
はずと各々語り合ひ居たるが、地方の法味に
湧したる信男信女としてほさもあるべし、諸
師の登壇の際に同地の特産物とも云ふべき
盛岡和紙の節も妙へなる談話ありて非常に何
處ともなく崇高の感念を起さしめ、説法壇上
に一種云ふべからざる威光を添へたるは他地
に於て其例を見る可らざるなり
●杜陵館大演説 同地音年信徒の發起にて十
七日午後五時市内公會堂杜陵館にて、大演説
會を開けり、演題は

◎佛統一 石川 顯隆師
◎日蓮上人の人格 關田 養叔師
◎檀上の主義 野口 日主師
◎演説の眞髓 本多管長親下
にて、此の夜は生憎雨天なりしに拘らず、聽衆
は潮の湧くが如くに打寄せ來り、無慮千二百
百名と註せられ、同地稀れなる盛況を呈せり
●中學校の修養講話 十六日午後二時、市立
中學校の講堂に應じ、管長親下には、同校雨天
運動場にて、在籍六百餘名の生徒と、同校長首

め教員二十九名の爲めに、日蓮上人と訓言」といふ題にて、日蓮主義獲得の修養法を教き多大の感動を興へたるが、講演終了後校長の如きは、非常の歡喜を以て謝意を表し居たり

●盛岡地明會の設立 一行の滞在中、青年信徒並に有志者十數名、中堅となり、同會を設立するに志すなり、十七日午前九時、會長親下大導師の下に一同寶前に法味を捧げ、それより、現下の調成ありたり、其の要旨は大聖人の人格及主義を研究して、健實なる信念を獲得すべきこと、及び強き意志を以て法義を味讀し體解すべきこと等にて、一日も又其の調成を空しふせざることを誓ひたり、此の日午後一時、親下並に野口關田石川師等の一行は、住職總代人及權信使、中學校長等老若信男女百餘名の盛んなる見送りを受け歸東の途に上りたり、茲に特筆すべきは八戸といへ、盛岡といへ歓迎の時よりも歸途の見送の非常に人数の上にも熱誠の上にも倍増し來るは、其の人情の厚きの點に於て、且つ其の信仰力の深大なるの點に於て他地方の盛盛とすに足らん

青森教信

●東都天晴會に足して生れたる青森地明會には客冬經川眞應師の通過せらるゝを逸し當日赤野老監督布教師北海道に往返此地を過らるゝを知らず至誠求道の士道徳播く能はざりし矢先十一月上旬本多大僧正親下には懸下八戸町本壽寺入佛式に飛集せらるゝを聽き好機速

●國民教育の真意義 代議士 島田 三郎の順序を以て講演あり一千有餘名の聽衆に多大の裨益を興へ散會したるは日全く暮れたる午後五時半頃なり當日各講師は午前八時兩國後、急行列車にて來會せる事として十時過ぎ着時時向風會支部事務所たる蓮福寺に於て休養し夫れより小春日初禮らけき種神社を訪ひ折柄風無きに散る銀杏の金葉を踏んで社前に一禮の後秋生風驟の遺物を覆て蓮福寺に歸り小憩の後會場へ趨けり其講演の大意は「統一」紙上に掲載すべし

社會事業同志相談會

明治四十一年以來内務省感化救濟事業講習會に出席したる千葉縣下同志は十二月二日本納町蓮福寺に相會して社會風教改善事業の爲に熱誠し現代風教の病根を救済するに努力すべきを協約したり而して社會各方面に於ける改善事業の多きを存する内現に切實に其必要を感ずるに犯罪人感化の事業なりとの意見に一致したり而れども此事業たるや範圍甚だ廣く感化亦容易の業にあらざるは識者の認むるところなるを以て同志は至誠以て此事業に當り漸次感化の成績を擧げんと期し先づ其第一として同志の決議したる實行方法として第一に免刑習業無業者誘掖少年學會の三項目を實行する者なり又同會は地方宗教徒及識者の助力を得て適當の事業を撰擇することをも策勵するに決し午後五時散會したり當日出席者は井口善叔、山岡會後、中村乾信、成島泰行

本納町向風會總會

千葉縣長生部本納町向風會支部にては十一月二十日午後一時より同町小學校に於て秋季總會を開き終つて講演會に移り支部長飯高氏の開會の辭ありて後

日本國民の責任 代議士 關 和知
實業道徳に就て 法學博士 浮田 和民

すべからず是非青森の地に於ても親教を仰がんと焦慮せりしかども本春大火災復舊未だ半ばならず會場に充つべき所無く御一行亦日程既に定まれるあり寸暇を有せられざる内強めての懇請に野口宗務總監特に来場の際電あり會員一同狂て計りの喜びにて十一月十二日午後七時師を青森驛に迎へ同夜直に積年の疑團感想を交々披瀝して師の高判を享け翌十三日午前青森開教記念の攝影を爲し午後一時より左の講演ありたり

會場は市内新安方町中島旅館を以てし映風風として致外波白き三層樓上會場茶室のや幹事中村謙藏君簡率に同會の辭を述べ野口眞正には日蓮主義なる題下に開口一番序論として精神修養の意義を明にし九議の説明より身心一體心玉本覺識より進る道の體顯者として靈肉共に光あるに於て始て精神修養の目的を達したりと云ふを得べしと論斷し第二座本論として佛教の三大問題を掲げ來り第一佛陀觀に於て諸佛觀一主義法界一佛久遠本佛を論明し第二人身觀に於て此法王の愛子たり是眞佛子たり一入身觀の發端たるべき吾等國民たるもの陸下尊嚴なると共に如何に自重尊嚴の者なるかを說明し第三國土觀に於ては東西古今の諸宗家の理想せる國土觀の誤見を擧げ法華經量品の我娑婆世界即寂光の妙土たるべく本佛の國土にして人身の依止處たりその娑婆世界の中にも道と光とを以て國徳と爲し玉へし天照大神の神裔道義の實行者として世界に君臨し國浮を統一すべき大使命を帯べる本妙國土は即ち我大日本帝國にして此道に契ふ處

東部講習會

△顯本法華宗第五回東部講習會は十一月二十八日より二十四日に至る一週間、千葉縣長生部本納町蓮福寺に於て開會したり講師として本多大僧正の關目抄兩要觀心本抄抄兩要(九時開)、野口眞正の佛教婦人觀(二時開)、錦織大僧正の一念三千論(或時間)、關田眞正の南無妙法蓮華經(九時開)、の講演あり本月四日午前十時閉會式を行ひ成島布教師の會務報告及び修了證書の授與あり尋て宗務總監野口眞正の布教上に對する訓話森川布教師(會後)の答辭ありて、萬歳三呼し更に別席に於て講習員一同の懇話會を開き各自胸襟を吐いて所感を爲し感興倍も湧くが如く夕陽西山に

第壹部監督布教師 巡教日誌 (其二)

廿一日 栃木縣片岡本經寺に入り其夜夜談會を開く
監督布教師の趣意
川崎 英照
野老 僧正

正信

翌廿二日 雨を冒して同縣より寶積寺驛に下車し入車にて二里余北高根澤に至る芝瀝山口口師出迎ふ。其夜妙福寺に教蓮を敷く
山口 宏瑞
川崎 英照

三寶信

建案七十餘にして餐會、其夜は妙福寺信徒總代鈴木須佐氏宅に宿す、同家は頗る舊家にして嘗て宗廟聖人御在世の御須野が厚温泉に御静養の途宿泊せられし舊跡たるよし
翌廿三日 夜同地妙福寺に演說會を開く
芝瀝 瑞良
川崎 英照

農事繁忙の時に關らず來聽者百餘熱心に奉聽せり其夜再び鈴木氏宅に宿し翌廿四日早天無切なる鈴木氏の待遇を後に信徒よりの供養に於ける乗馬に六里の難道を山口芝瀝兩氏に送られつ、茂木町本納寺に入る、此地に櫻草專賣局あり戸數二千五六百繁華の地にして布教

上有望の地なり其夜同寺に教説を敷く
大日本國と日蓮聖人
山崎 安雄
日蓮聖人の慈悲
芝沼 瑞真
合理的信仰
川崎 英照
眞に自己を知れ
野老 齋正

庭菜六十数多からずと雖も常に法雨に濡れし
地として多大の感動を興へたり、其夜本園寺信
生井松吉氏宅の懇切の待遇を受けて一泊す
翌廿五日乘合馬車にて波り四方の景色を眺めつゝ右
名なる絹川に入る、芝沼山口師亦随行せり
宇都宮に友人木村義明師の規模にして久々の
會合に舊情を暖め翌廿六日演説會を開く
開會の辭
木村 義明
人世消化法
川崎 英照
日蓮主義
野老 齋正

茲に幸ひ一日の餘裕を得て廿七日早天字都宮
を出發し日光に至り草鞋の紐かたく直ちに中
禪寺に登る、満山悉く織り出す錦、而も華嚴
阿含、方等、華嚴の白蓮水音高く山の風情を
添へぬ、夕刻漸く山を下りて神山旅館に一宿
し翌日日光宗廟に半日を費し其夜東京に入り
ぬ、野老上人は翌朝上述に母堂の新靈を叩ふ
べく出發せられ、十一月一日藤川管長親下の
許に伺候して諸教の報告を終へて今成野正の
歡迎を受け其夜淺草にかへり、山根管事を訪
ふて野老の布教は後日を期す事とし、國田布
教師の實業青年會を視察し野口信正宅に宿り
翌二日新編を發し鎌倉飯田の本興寺に向ふ午
前十一時戸塚驛に至れば總代出迎へ人車を雇
つて二里半にして本興寺に着て、本興寺は開

山聖人御直進の靈場にして菘原布教師常に法
蓮を敷けり其日午後演説會を開く
開會の辭
萩原 啓門
日蓮主義の一端
川崎 英照
佛教の眞髓
野老 齋正
來臨者百餘名事務繁忙の節としては成効也、其
夜再び開會す
日蓮主義の一端其二
野老 齋正
宗教と道徳
川崎 英照
野老 齋正

北海道巡教所感
野老 齋正
眞の佛教
野老 齋正
横手に箱根山を圍んで相模灣に望み、遙かに
富嶽を得て小田原は風景の能き地なり、演
説を終るや本山に取巻く所用あるを以て其夜
二時國府津夜行に乘じ翌四日午後四時本山
着盛んなる慰勞の宴を受く茲に第一部監督布
教巡回の一段落となし、東海道地方は明春を
期して進教と決定せり、尙翌五日堺の村上貞
藏氏危篤の報に接して之を見舞ひ、十日遂に
逝去せられしを以て之を弔ひ引續き難路に於
ける盛んなる野老監督布教師歡迎會の席末を
汚すの光榮を得たり
因に今回の進教に就て寺院住職諸師長檀信
徒諸氏が淨き勢を感謝し併て將來益々大法流
布社會改善の爲めに盡せん事を囑望す

十一月三日午後六時より五條阪上行寺に於て、
佛教演説會開催候
大なる慈悲
高貫 慎一
佛陀の慈悲
高貫 慎一
圓滿なる信仰
高貫 慎一
○十一月十九日日本山例會午後六時開會
會津巡教所感
川崎 英照
十一月廿日午後六時より川東女子守學校内に開
催候演説會左の如し
時代と佛教
上村 寛澄
眞の中を執れ
中村 寛澄
眞に清に依て築へ
鈴木 孝順
十一月廿五日午後六時より愛媛寺に於て開會
開會の辭
石田 秀敏
大なる苦れ
川崎 英照
各會場共熱心なる來臨者多數ありて盛會なり
十二月四日午後一時より同志會廿三回例會
を川東深光寺に於て開會并に常置員鈴木孝順
布日潮深谷組三折は在期満るに付同日改
選ある若終て忘年會を催す事に候

京都通信

十一月廿日午後六時より同志會秋季講演會
催候演説會左の如し
時代と佛教
上村 寛澄
眞の中を執れ
中村 寛澄
眞に清に依て築へ
鈴木 孝順
十一月廿五日午後六時より愛媛寺に於て開會
開會の辭
石田 秀敏
大なる苦れ
川崎 英照

廣島縣井原高源寺檀家
金貳拾圓(四)千葉縣草刈行光寺住職小高榮部
金拾圓(三)東京市四谷法恩寺前住職森本真良
金四圓 三浦藤四郎 金貳圓 佐藤信太郎
加藤京平 全友一 全彌十郎 全信次郎
福原春作 世羅徳松 全宮藏 全りせ
全孫三郎 全小三郎 全孫四郎 全惣四郎
全中四郎 全直藏 中村孫一 壹圓四拾
錢 世羅清太郎 壹圓貳拾錢 世羅徳松
壹圓宛
加藤徳太郎 世羅疑四郎 全喜太郎 全保
五郎 全本藏 全方太郎 全萬吉 全仙太
郎 全伊三郎 全貞平 全直四郎 全榮吉
全市藏 全麟藏 全助三郎 全喜代藏 全
政吉 全元平 加藤又市 八拾錢 世羅恒
藏 全新吉 全藤吉 全初藏 全要吉 全
文九郎 全周藏 六拾錢宛 世羅石太郎
全武市 全龜太郎 全基七 全仁吉 全仁
六 全勘四郎 荒川惠吉 五拾錢宛 加藤金
平 全藤三郎 四拾錢宛 加藤徳平 世羅
彌市 全佐市 參拾錢宛 世羅齊平 全トメ
全文祿 全三藏 全清八 壹圓拾錢 加藤
佐助外五名(以上第三回) 六拾錢 世羅徳
次郎(第二回)

教學財團基金

寄附申込報告

第三十八回(四十二年十一月廿一日迄分)

- 通常會員
千葉縣南横川芳頂寺檀家
金拾五圓 全
金拾圓 全
金拾圓 全
金拾圓 全
金八圓 全
千葉縣南横川芳頂寺檀家
金八圓 北田傳左衛門 金六圓 北田 卯八
全 縣富田福田寺檀家
金五圓 有田平次郎 金五圓 黒川清五郎
全 有田七郎兵衛 金貳圓 今井喜十郎
金貳圓 河野新太郎 金壹圓 今井養之助
金壹圓 黒川 源吉 全 三枝久三郎
全 縣長谷川正覺寺檀家
金壹圓 駒 貞次 金參圓 駒 勲次郎
全 駒 安藏 全 柳井松之助
全 唐鎌 熊吉 全 並木 國松
全 並木 庄助 全 田邊 治助
全 金貳圓 田邊 甚松 金貳圓 駒 由太郎
全 駒 金助 金壹圓 駒 春吉
金壹圓 並木剛市郎 全 鈴木善治郎

教學財團基金

受領報告

第三十六回(四十二年十一月三十日迄分)

- 田邊與惣松 金五拾錢 田邊ろく
全 田邊石松 全 駒 源之助
全 藤谷 吉藏 全 御手洗傳右衛門
石川縣金澤本覺寺檀家
金參圓 小倉 正恒 金參圓 小野翔三郎
金貳圓 武山 秀松 金貳圓 藤田七次郎
全 杉村信太郎
會員別ニ入ラザルモノ
金拾圓 千葉縣南白龜村刺金 眞 光 寺
金八圓 全 縣關村北日當 眞 福 寺
金六圓 全 縣全村福島常福寺 檀家中
小計百五拾參圓五拾錢
千葉縣南横川芳頂寺檀家
金拾五圓 全
金拾圓 全
金拾圓 全
金拾圓 全
金八圓 全
千葉縣南横川芳頂寺檀家
金八圓 北田傳左衛門 金六圓 北田 卯八
全 縣富田福田寺檀家
金五圓 有田平次郎 金五圓 黒川清五郎
全 有田七郎兵衛 金貳圓 今井喜十郎
金貳圓 河野新太郎 金壹圓 今井養之助
金壹圓 黒川 源吉 全 三枝久三郎
全 縣長谷川正覺寺檀家
金壹圓 駒 貞次 金參圓 駒 勲次郎
全 駒 安藏 全 柳井松之助
全 唐鎌 熊吉 全 並木 國松
全 並木 庄助 全 田邊 治助
全 金貳圓 田邊 甚松 金貳圓 駒 由太郎
全 駒 金助 金壹圓 駒 春吉
金壹圓 並木剛市郎 全 鈴木善治郎

神奈川縣飯田本興寺檀家

- 飯島平右衛門 保田喜助 全圓
金參圓 飯島平右衛門 保田喜助 全圓
吉 全徳藏 金貳圓 遠藤幸助 全金藏
保田竹治郎 梅澤藤吉 廣田庄吉 壹圓宛

三橋伊三郎 保田大市 全庄藏 六拾錢宛
 遠藤爲松 保田平藏 秦野其五兵衛 渡邊
 喜一作 五十錢宛 遠藤直次郎 保田伊世
 松 全清藏 全庄之助 四拾錢宛 遠藤漢
 五郎 保田清太郎 全園藏 全幸八 參拾
 錢宛 保田安光 全太四郎 全牛藏 壹圓
 八拾錢 三橋太七外八名(以上第二回)

●千葉縣長谷川正覺寺檀家

金壹圓(三)住職廣部支道 金四圓 駒達太
 郎(二)金參圓 柳井松之助 五拾錢
 御手洗傳右衛門(音助) 壹圓五拾錢宛 壺
 木庄助 全園松 唐隆齋吉 駒貞次 全安
 藏 全助太郎 田邊治助 壹圓宛 田邊甚
 松 駒由太郎 全金助 五拾錢宛 田邊興
 徳松 駒春吉 壺木彌市郎 鈴木善治郎
 貳拾五錢宛 田邊石松 全乃く 駒源之助
 磯谷吉藏(以上牛額納)

●同縣七渡龍鑑寺檀家

金五圓宛 秋葉逸藏 森川重藏 參圓參拾
 參錢 秋葉岩太郎 壹圓六拾六錢宛 森川
 康 高橋彦太郎 牧野亥三郎 齋藤宗吉
 牧野正雄 壹圓 秋葉健吉 森川勇吉 六
 拾六錢 高山榮造 今井己之助 秋葉豐作
 五拾錢宛 高山憲造 秋葉長之助 全市藏
 森川久馬吉 牧野芳太郎 森川鶴次郎 參
 拾參錢 高橋初次郎 白石一郎 高山其藏
 壹圓拾錢 高山源吉外六名(第三回宛納)

●福井縣金津妙隆寺檀家
 金貳圓 北島長左衛門 壹圓宛 北島喜左
 衛門 全 六左衛門 小倉利助 木村又吉
 六拾錢 小橋利三吉 四拾錢宛 小泉寅吉
 井上元吉 貳拾錢 北島市之助(第三回)

●京都府木崎大乘寺檀家

金五圓也 勝田藤吉 全 榮吉 全新治郎
 全 寅吉 全忠太郎 全信治郎 全宇太郎
 全勝次郎 全表吉 全五郎助 全伊之助 第
 一回)

第三十五回報告中 八拾圓 沼向長福寺分内
 譯左ノ如シ

五拾圓 矢部吉 國圓宛 原藤吉 關本末
 吉 中村フナ 北田和一(二) 貳圓廿錢宛
 加藤淺吉 貳圓宛 板倉七郎 關本芳藏
 壹圓六拾錢 幸治慶吉 一圓宛 久賀吉五
 郎 河野初五郎 田中トヨ 八拾錢 石井
 藤吉 七拾錢 飯田又吉 中村徳二 六拾
 錢 河野由之丞 四拾錢 加藤房吉(第一回)
 全報告中二拾圓金澤本覺寺分内譯下ノ如シ
 參圓六拾錢(三) 完)石塚日孝 參圓宛(完)
 小倉正恒 小野朝二郎 貳圓宛(完)武山秀
 松 森田七次郎 一圓七拾錢 (二) 完)小
 野常子 壹圓貳拾錢(二) 完)關本方恒 壹
 圓(完) 中村欣一郎 八拾錢 杉村信太郎
 六拾錢 關本紅太郎 四拾錢 井上一信
 牛田キン 參拾錢 中村直義外一名



版出子册導傳本施

海軍大佐子爵小笠原長生君閣下著

立正安國 全

立正安國、これ日蓮上人開宗の主眼である「先づ須らく國家を祈りて佛法を立つべし」とは大上人の宣言である、國の精神は法である法の活用は國である、この因縁果報は立正安國である、眞の利益とはこれである。

此立正安國主義を以て世を救ひ人を導くのが、眞の忠君愛國であると信じて居らるる子爵は、弊社が施本傳導の出版に對し筆を以て助くるも爲國爲法であると信じられ給ふて、弊社がこの舉に對し多大の同情を以てこの一篇を公にせられ給ふたのである、世の營利的著述家や利己的出版物とは丸で目的が異なる。

サン、其の説明も平易懇切で誰れにでも解る様に出來て居る、何でもよい早くこの日蓮主義を傳へたいのが、我等が事業の全部である。今や狂暴なる社會主義者は筆殺の下から檢舉された軍人と雖、劍を握りつゝ日蓮主義を説かねばならぬときである。

海軍大佐子爵小笠原長生君閣下著

一 大事因縁 全

惣本山身延にては此の如く法華經と日蓮上人と日本國との因縁關係を簡明の切に知らしめて居る良書は尠いこの書を讀みしむることは唯法の爲めのみでない日本國の爲めであると仰せられて本書一萬部を施本せられ玉ふてある………以て此書の内容と價值とを知るべし

來ル十二月一日發行

定價 十部以上 壹錢八厘
 一百部以上 壹錢五厘

大石養淳著

通夜說教自在集 II

紙數々百頁
表紙美裝

定價當分の内金六拾五錢送料共

普通法要通夜、開帳通夜、葬式年回通夜、一般通夜連夜說教に其儘用ゆる事を得、殊に會式通夜にも適用し法說、譬諭說、因緣說は一座毎に具備し、幾夜の說教にても決して窮束を感じずる事なく且つ著者獨特の悲話、滑稽說を說教其儘に載せ殊に古人櫻井日邦老師の說教（未だ一度も世に出てざりし遺稿）をも加へ又材料は豊富にして眞に說教自在集なり宜しく說者不說者を問はず老練と否とに論なく必らず一冊を持すべきなり

後志國古平港古平町三六三
振替口座 東京四七五貳番

日蓮宗布教院長 子 爵 小笠原長生君序文
旭日苗師題字 日蓮宗大學長 日蓮宗大
顯田堯傳師題字 學教授 福田 海素師序文
顯本法華宗管長 同 講師 荒木 秀明師編纂
本多日生師題字

日蓮聖人靈蹟寫真帖 全

天地八寸五寸巾二尺二寸五分綴子表紙大和
綴裝訂頗優美美術精巧寫真版百十餘個箱入

◎定價金五圓 內地小包料金貳拾錢
數十部限 特價金參圓八拾錢

本帖は非常の好評を以て迎へられ今や僅かに數十部を
餘すのみ苟も日蓮門下に在るものは聖祖活動の靈蹟を
知らざる可らず敢て之を齎むる所以也。

東京市淺草區北清島町十四番地

發行所 北天教光社

宮殿●須彌段
前机●幢幡
大販賣
御來店の節は陳
列場へ御來車被
下度はれ迄とは
一層勉強仕一切
各宗の佛具陳列
仕置候

正價 三法堂佛具發賣目錄



注意
佛具と稱すは此の種數多岐有之候を以て一々記載する能は
ず依て特記佛具正價附發賣目錄書を製作致置候に付御入用の
諸君は郵券四錢附發賣目錄書を以て送達進呈仕候此の目錄
御覽あれは寺院佛具の御入用品一切の買物何處遠方でも益な
らば買物安價にて可升早く取らせ御覽あれ其の正價附の品は
左の通り

佛具卸部 本舖 三法堂藤田總次
通小橋西入 振替貯金 東京二〇七九
特電話二千七百八拾三番 振替貯金 大阪二四二五九
同市三條 通大橋西入

●小賣部 同市三條 通大橋西入 三法堂佛具陳列場

勤行作法

勤請文、勤行讀誦（方便品十如是自我佛）正行唱題
回向文、受持文、○自我佛讚
右は各派統一の理想の下に本多日生師の編纂せられた
るものにして、勤請文、回向文の如き最も簡潔にして
而も其要義を逸せず總振假名付なれば初心の行者の所
用として最も適切なるもの今回本會に於て會員の爲
めに印刷に付したるを以て其殘餘數百部は一般信徒の
爲めに之を願たんとす、御入用の方は前記代金を添へ
て御申込ありたし

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地
妙教婦人會
毎月一回十五日發行、一部金六錢 郵税五厘 一ヶ月前金六拾
五錢郵税六錢 代金ハ振替貯金口座東京二一九番へ拂込マレ
タシ此場合ニハ 送料ノ外ニ金壹錢ヲ添付相成度候

明治四十三年十二月十五日印刷發行

發行所 東京市淺草區北清島町十四番地
發行所 統團